

## 【研究報告】

# ある精神障害者の社会参加への過程

—作業適応の視点から当事者の手記を分析する—

齊藤 ふみ<sup>1)</sup>, 小田原 悦子<sup>2)</sup>

1) 浜松市リハビリテーション病院リハビリテーション部

2) 聖隷クリストファー大学リハビリテーション科学研究科

E-mail: 07r001@g.seirei.ac.jp

## The Process Towards Social Participation of a Mentally-challenged Youth: A Narrative Analysis using the Perspective of Occupational Adaptation

Fumi Saito<sup>1)</sup>, Etsuko Odawara<sup>2)</sup>

1) Department of rehabilitation, Hamamatsu city rehabilitation hospital

2) Division of Rehabilitation Sciences, Seirei Christopher University

### 要旨

精神障害を持った人が健康感を持って社会に参加するためには何が必要なのか, 統合失調症者の西純一氏(仮名)の手記「精神障害を乗り越えて40歳ピアヘルパーの誕生」を読み, Schultz & Schkadeの「作業適応過程モデル」を参考に回復段階ごとの日常生活の作業経験を分析した. 本研究はナラティブ分析による質的研究である. Schultz & Schkadeは, 人は環境との交流の中で, 「出来るようになりたい」と願い環境に働きかけ(習熟願望), 環境は人に「できるように」期待, 要求する(習熟要請)と述べた. その結果, その環境との交流で, 人は作業に従事して環境に挑戦し, 役割を得ると指摘した. 西氏の場合, 症状の強い段階では彼の環境は制限され, 心身の保護とセルフケアが生活の主要な作業であったが, 回復に従って環境からの要請が生産的なものへと移り変わり, それに応じて社会的な作業を通して環境に働きかけることで西氏は社会参加を実現させた. 作業療法においては, 健康感を持って社会に参加するように援助するためには, 最大限の適応反応を導くことができる環境を見極めることが必要であることが示唆された.

キーワード: 作業適応, 環境, ナラティブ

Key Words: Occupational Adaptation, Environment, Narrative

## I. はじめに

作業療法士は、対象者が社会参加を実現するように援助することを期待される。世界作業療法連盟 (World Federation of Occupational Therapists : WFOT, 2012) が提唱する定義では、「作業療法とは、作業を通して健康と健康感を促進する専門職である。作業療法の主目標は、人々が日常の生活活動に参加できるようにすることである。そのために、作業療法士は人々が参加する能力を強化することができるようにし、参加を支援する環境を調整する」と述べられている<sup>1)</sup>。

入院治療の後、自宅退院した患者が社会参加に至ることは必ずしも容易でないことはしばしば指摘されている。伊藤<sup>2)</sup>によると、特に、精神障害の領域においてはそれが顕著で、人々の障害理解や地域の支援体制が不十分なために社会参加が実現されにくい。障害を抱えながら社会の中で安心して生活していくためにも、人と人とのつながりを維持し続けるネットワークの確保が重要であるが、精神障害者は生活上の人間関係が途切れやすく、社会の中で孤立しがちであることが顕著に影響していることも指摘されている<sup>2)</sup>。

作業療法において、作業を介した人と環境の関係が重要であるということを、Schultz & Schkade は「作業適応」という概念で強調している<sup>3)</sup>。ここでいう環境とは、人を取り巻くすべてのものを指し示し、場所や空間などの物理的な環境だけでなく、家族や友人、治療に関わる療法士など、その人に関わる他者も含まれている。Schultz & Schkade は、「作業適応理論」において、人が環境との間で作業に挑戦し、役割を得て、さらに作業に従事していく過程を「作業適応過程モデル」<sup>4)</sup>として提示している (図

1)。さらに、人は環境との交流の中で「出来るようになりたい」という「習熟願望」を抱き、環境からはその人が出来るようになることが「習熟要請」という形で期待されると指摘している。人が持つ習熟願望と環境からの習熟要請の交流により、習熟のプレッシャー (習熟重圧) が生じて作業への挑戦が生まれ、作業役割や期待が生じて適応反応へと繋がっていく。これらの反応の中で人は作業を遂行し、自分から出てくる習熟願望と環境からの習熟要請が満たされるほど成功体験を積み重ね、作業への積極的な働きかけが生じると、Schkade & Schultz は考えた。逆に、習熟要請や習熟願望が十分に満たされない状況下に陥ると、人は環境に働きかけることができず、機能障害が生じると指摘している<sup>3)</sup>。

そこで、精神障害を持った人が適切に環境と適応して、健康感を持って作業に従事して生きていくためには何が必要なのかを明らかにするために、統合失調症者の西純一氏 (仮名) の手記「精神障害を乗り越えて 40 歳ピアヘルパーの誕生」を読み、「作業適応過程モデル」を参考に著者の日常生活の作業経験を分析した。

## II. 方法

### 2-1. 分析対象

分析対象は、西純一氏 (仮名) の手記「精神障害を乗り越えて 40 歳ピアヘルパーの誕生」<sup>5)</sup>である。統合失調症のある西純一氏 (仮名) の手記「精神障害を乗り越えて 40 歳ピアヘルパーの誕生」の記述をデータとして分析し、彼の作業経験を環境との関係で分析し、その適応過程を理解した。

西氏は、1966 年に日本のある地方に生まれた。大学時代に統合失調症を発症し、計 4 回の

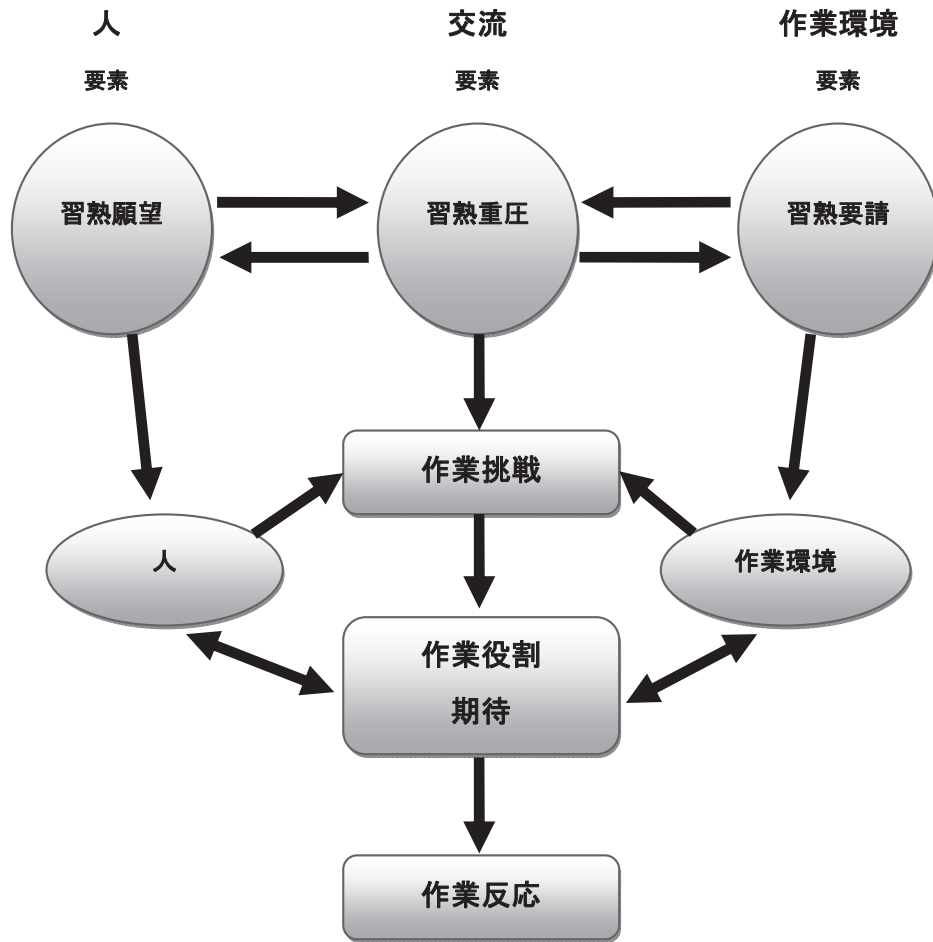


図 1. 作業適応過程モデル (Schkade, J. K. & Schultz, S., 1992, p.832, Figure 1.) を示した

入院歴がある。闘病生活の経験を生かして 40 歳の時に精神障害者専門ホームヘルパー（ピアヘルパー）となった。この手記には以下のように、ピアヘルパーとして充実した生活を構築するまでの経験が述べられている。

西氏は、大学時代に外国旅行中に裏切り行為にあったことから他者への不信感が強くなり、精神的に不安定になったことから幻聴や不眠の症状に苦しむようになり、統合失調症を発症した。

1 回目の入院では、錯乱状態に陥って現地の精神病院に運ばれて保護室に入り、家族の付き添いのもと日本に帰国し通院を始めたが、自己

判断で服薬を中断した。復学後、企業に就職したが、同僚との人間関係のトラブルがきっかけで再発した。通院と自宅療養により回復したが、意気投合し信頼していた職場の友人に価値観のずれの違いから不信感や怒りの感情を持ち、不眠、被害妄想の症状が出始めた。そのため、休職を余儀なくされ、主治医を訪ねるため病院へ向かう途中で錯乱状態に陥った。

2 回目の入院で保護室に入り、閉鎖病棟で過ごした。その後、自宅療養をしながら通院し、休職期間を利用して身体障害者や知的障害者の施設でボランティアを始め、それがきっかけで転職を決意した。30 代の時に会社を退職し、

知的障害者を対象にした作業所で働いたが、陰性症状が強く、完全に病状が回復していない中での再就職であったため、職員と信頼関係を築くことができず、退職し入院した。

3回目の入院では、総合病院のリハビリテーション精神科の開放病棟に入院し、1年半で退院しデイケアに通った。西氏は、デイケアで箱折りやボールペンの組み立てなどの簡単な軽作業を行ううちに仕事を探したいと思うようになり、障害者の就業等の相談に対応する公的な組織を利用し、印刷所の仕事に就いた。しかし、調子を崩し、症状が悪化したため再びデイケアへと戻り、職業訓練として地域作業所に通い始めた。その時、作業所の所長に「あなたは優しいし、コミュニケーション能力が高いのでピアヘルパーに向いている。」と勧められたことをきっかけに、ホームヘルパーの資格を取得し、40歳の時にピアヘルパーとして、同じように精神障害を持った人の地域生活を支援するようになった。

## 2-2. 分析手順

人々の日常生活の経験を理解するために、会話、インタビュー、経験談、エッセイ、日記など、人が語った、または記述した「ナラティブ(語り)」を分析する「ナラティブ分析」がある。話し手や書き手の経験を理解するために、収集したナラティブを研究者の視点を通して分析する<sup>6)</sup>。現象を多元的に捉え真実に迫ろうとすることに繋がり、研究の厳密性を高めていることが指摘されている<sup>7)</sup>。また、ナラティブ分析は、語り手の詳細な状況が厳密に記述されることから、研究する現象の意味を深く捉え、記述された出来事を読み手側に疑似体験として経験させることができる。そのため、読み手が研究結果を実践に還元する可能性が高まり、意味のある

研究に繋がるということが指摘されている<sup>7)</sup>。

本研究は、西氏の経験を理解するために、彼の手記を読み、彼が記述したナラティブを分析した質的研究である。西氏が、統合失調症発症後の入院からピアヘルパーになるまでの期間について、①前述した西氏の経過を時期ごとに述べる、②その時期における彼の作業経験を「作業適応過程モデル」に基づいて分析する、という手順で分析を行った。各段階における作業経験とそれが行われている作業環境について分析し、作業適応の視点から結果および考察として述べる。そして、精神障害を持つ人が健康に生活するために何が必要なのか、それを援助するために作業療法に求められることについて筆者の見解を述べる。

## Ⅲ. 結果および考察

西氏の手記で語られた時期には、「保護室」、「閉鎖病棟」、「開放病棟」、「デイケア」、「作業所」、「ピアヘルパー」の6つがあった。各時期における環境と其中的西氏の作業経験を分析し、西氏の作業適応の過程について理解した。

### 3-1. 「保護室」の時期

西氏は海外旅行先で統合失調症を発症し、精神科病院に入院し、保護室に入ることとなった。西氏はこの著書の中で3度入院を経験しているが、保護室には2度入った経験がある。どちらも閉鎖された、昼2～4畳分の狭い空間に水洗トイレが設置されているだけの部屋で、生きるために必要な日常の作業と治療をうけることを期待された空間であった。

この時の西氏は、錯乱状態で正常な判断が難しく、暴れる危険性があった。そのため、ベッド上に仰向けに寝かされて両手両足をベッドの

脇に布で固く縛られ，局部に尿器を設置されてまったく動けない状態となっていた。西氏の一日の過ごし方は，食事を待つだけで他に何も行う作業がなかった。このような環境の中で，手記の中で，『「実験台にされるのではないか』，『ここで死んで行くのだ。』と誇大妄想が出現していた。』と述べていることから，彼は被害的に経験していたと考える。

**環境からの習熟要請：**保護室という環境は，要安静期にある西氏の「安全・安心の場の保障」のために，外界からの刺激を遮断し，興奮状態や錯乱状態から自分を傷つけたり，他者に危害を加える危険から身を守るという役割を果たしていた。環境は西氏が生きていくための必要最低限の作業ができることを期待していたと考える。

**西氏の習熟願望：**山根による統合失調症の回復段階<sup>8)</sup>に基づけば，西氏は，要安静期の段階，つまり，身体治療による病状の軽減と救命・安静のためのリスク管理が重要な時期にあったと考えられる。この時期の西氏は「次はこれしよう」「あれがいい」などの作業の選択や自己決定は難しく，作業への積極的な働きかけを行う余裕はない状態である。西氏は保護された空間で，食事や排泄，睡眠の生きるための基本的な作業ができることを求めていると考える。

この段階の西氏は自傷他害の危険のために，守られた環境下で周囲からのケアや介助が必要な状況であり，地域社会などの環境では当たり前に行われる生産的な要請に応えることは，困難な状態であったと考える。

### 3-2. 「閉鎖病棟」の時期

閉鎖病棟は，保護室よりも行動は自由だったが，病棟のドアは施錠されて病棟外には自由に出られなかった。西氏は，劇的な興奮や錯乱を

脱していたが，周囲に対して過敏に反応しており，患者同士の窃盗や暴力を恐れて，いつも落ち着かずに怯えていた。看護師との関わりは，服薬やセルフケアの管理，買い物の付き添いなど，治療や病棟生活に必要なことに限られ，それ以上の交流は述べられていない。この時の西氏は，主体的に自分から何か行うということはなく，必要最低限のセルフケアと服薬のみを行い，自分を守ることで精一杯であったと考える。

**環境からの習熟要請：**この時期の西氏は周囲からの介助やケアが必要な状態で，環境からは治療に専念することが求められていた。山根の回復段階によれば，この時期の西氏は亜急性期にあったと考えられる<sup>8)</sup>。亜急性期には，人はさまざまな刺激に過敏に影響される不安定な状態，もしくは反対に，罹患に伴う疲弊から極端に活動性が低下した状態である。積極的に何かを行うということよりも安心できること，不安が軽減されることが重要であり，ここでも，「安全・安心の場の保障」が環境の役割として機能していると考えられる。

**西氏の習熟願望：**閉鎖病棟は拘束による制限はなく，生命の危機や自傷他害のリスクは，保護室よりも減少しており，西氏はセルフケアが行えるようになっていた。しかし，他患の様子におびえて過ごしているなど，不安定な状態であることには変わりなく，自発的に「何かできるようにになりたい」ということを望む余裕はない。自分の身を守ってセルフケアを行うという必要最低限の作業を遂行することで精一杯であるといえる。

このような西氏の状況から，環境は習熟を期待するというよりも，依然として安心や安全の場を保障しつつ，必要最低限の作業の遂行を支援するといった状況となっている。

### 3-3. 「開放病棟」の時期

開放病棟にいた時の西氏は、セルフケアや服薬だけでなく、自分のやりたいことを選び、より開放的な空間で自発的に体育や革細工、パソコン、読書、レクリエーションに参加していた。同じ病気を持った患者との仲間づくりや恋愛を経験したことも述べており、「食事がおいしくないことを除けばけっこう楽しいものであった」と開放病棟での経験を述べている。そして、退院する際には、「当然、不安はあったが、それよりも逆に、何か希望を感じさせてくれるものがふつふつと沸き上がってくる気がした」と西氏は述べており、「再び一般社会に向けて旅立とう」と社会復帰への意欲を見せた。

**環境からの習熟要請：**開放病棟の生活では、スケジュールに従って行動することが求められている。環境は、西氏に規則正しいリズムの日常生活を行い、他の人たちと交流し、協力し、主体的に作業を選択して遂行することを要請し、退院後の生活をイメージしていく場としての役割を備えていると考えられる。

**西氏の習熟願望：**西氏は、開放病棟で、「何かをして楽しみたい」「誰かと関わりたい」という習熟願望を持って、生活に楽しさを見出したと理解される。他者との関わりを持つようになり、その中で作業を自己決定しながら遂行することに挑戦し始め、挑戦と要請の兼ね合いの中で楽しみを感じる余裕がでてきたと理解される。

開放病棟の環境からの習熟要請に応え、自発的に作業を選択・遂行することが可能となり、作業に挑戦して、他者と交流し楽しむことも可能となったと考えられる。これらの挑戦の末に社会復帰への意欲を生み出し、自己決定をして余暇的な作業を行い、新たに環境に働き掛けることが可能となったと考える。

### 3-4. 「デイケア」の時期

西氏は開放病棟を退院した後に精神科デイケアに通い始めた。そこで話を聞いてくれる担当主治医や同じ病気を持った仲間に出会い、スポーツ、カラオケ、料理といった活動プログラムや季節の行事を楽しんだ。通常、精神科デイケアは、同じ病気を持った仲間との関わりの中で、スケジュールに合わせて作業を遂行する場であり、規則正しい生活リズム、交流のための技能、余暇の過ごし方といった地域社会の中で生活していく上で必要となる能力を身につけることを目的としている<sup>7)</sup>。

西氏は、社会復帰のために、生活リズムを整えることを目的としてデイケアに通ったと述べている。半年後には、デイケアにも慣れ、作業グループという部屋で箱折りやボールペンの組み立てなどの簡単な軽作業を行うようになった。1日3時間程度ではあるが、作業に集中して取り組むことが可能となり、入院していた頃のことを考えると大きな進歩であった。軽作業を始めて約半年後には仕事探しに意欲を持ち、デイケアよりもワンステップアップした職業訓練の場所として作業所を選択した。

**環境からの習熟要請：**デイケアにおける環境からの要請は、当初は、生活リズムの調整や対人交流ができることだったが、西氏の生活リズムが整いデイケアに慣れた段階で、仕事の作業へ移り変わったことが理解される。

**西氏の習熟願望：**デイケアでの経験を通して、西氏の習熟願望は、「仲間と楽しみたい」ことから「社会で働きたい」という、より高次の習熟願望へと変化したと理解される。作業の耐久性が向上し、入院していた頃と比較すると出来ることが増えてきたことに達成感を感じ、成功体験へとつながったのではないかと考えられる。この体験が次の段階の習熟願望を生み出し

ていったと考える。

環境からの要請に応じて規則正しくデイケアに通い続け、その中で成功体験を積み重ねていくことで西氏は自分が認められる経験をし、転職という次のステップへの意欲を向上させる結果となった。段階的な習熟要請と習熟願望の変化が西氏をさらに社会参加へと促したのではないかと考える。

### 3-5. 「作業所」の時期

西氏は、デイケアよりも「ワンステップアップした職業訓練の場所」として作業所を選択した。作業所は、午後4時半までとデイケアよりも滞在時間が長く、就労状況に近い環境であった。作業所では、自分の能力やニーズに合った軽作業を行いながら、掃除や料理、洗濯などの作業を当番制で行った。他者と協力して、割り当てられた自分の役割を予定通りに遂行する自己管理能力が必要な環境であったと考えられる。

入所して1年が経った時には作業も軌道に乗り、西氏はそろそろアルバイトを始めて社会へ進出したいと思うようになった。その旨を所長に伝えたが、所長からは「焦ることはない。まだ働くには早い。」との回答が返ってきた。西氏は、社会復帰への焦りは、精神障害者にとっては禁物であることを理解し、所長の言葉を受け入れたが、退院してからすでに4年半が経っていた。

西氏のピアサポート研修会の報告を聞いた作業所の所長から「あなたは優しいし、コミュニケーション能力が高いのでピアヘルパーに向いている。」とアドバイスを受けたことをきっかけに、西氏はホームヘルパーの資格を取得するために専門学校に通い、40歳の時にピアヘルパーとして精神障害を持った人の地域生活を支

援するようになった。

**環境からの習熟要請：**作業所は職業訓練の場であり、一人一人の作業遂行能力を考慮した上でスキル訓練を行っている。作業所の環境は作業遂行能力に合った職業技能や自信を身につけることを要請している。

**西氏の習熟願望：**西氏は、仕事に就きたいという習熟願望を持って、職業訓練という挑戦に従事していた。その作業挑戦の中で、そろそろ社会復帰をしたいと思うようになり、「アルバイトを始めたい」という願望を持った。しかし、環境からは「まだ社会復帰の時期ではない」と期待されなかった。それを理解した西氏は、環境からの要請に従い、作業所での挑戦を継続したと考えられる。しかし、その後の所長のピアヘルパーの勧めは、環境からの要請と考えられる。この要請は西氏の「同じ精神障害を持つ方の癒しとなる援助をしたい」という習熟願望と一致し、彼の社会復帰に向けた挑戦が始まった。この過程が、西氏にとって社会の中で評価され、自己を認められた経験となったと考えられる。

### 3-6. 「ピアヘルパー」の時期

西氏がなろうとしたピアヘルパーとは、同じ体験や悩みをもっている仲間同士の相互支援を意味しており、主に、精神障害者による精神障害者のためのホームヘルプサービスを示す<sup>9)</sup>。ピアヘルパーは、法律に基づく資格ではないが、自分の経験を開示した精神障害者とその資格を取得して、同じ精神障害当事者のために行う生活支援である。

西氏がピアヘルパーのみで生計を立てるのは困難なので、安定した生活のためにアルバイトを探す選択肢もあったが、彼は「同じ精神障害を持つ人の癒しになりたい」という強い思いを持ち続け、資格取得のために多くの時間と努力

を費やしてきた。彼は、とにかく仕事の依頼が来るのを待ち続けたことが理解される。

西氏は、ヘルパーの仕事は掃除や洗濯や調理の家事援助が中心であり、家事をすることが当事者支援だと信じていた。西氏は、依頼者に「別にやってもらうことはない」と言われても、買い物頼まれても、自分の判断で調理を続けた。突然依頼者に、「誰もそんなこと頼んでいないでしょ。ただ話し相手になってくれればいいんだよ。」と怒鳴られ、初めて依頼者の本音に気づくという出来事が起こった。西氏はこの出来事をきっかけに、当事者が、ピアヘルパーである自分に求めているのは、話し相手になってもらいたい、癒してほしい、ということを実感した。西氏は依頼者の話を傾聴することを重要視するようになり、依頼者の話し相手や相談相手になることに徹した。これらの経験を繰り返す事で、西氏は仕事にやりがいを感じるとともに、病気の症状も感じないほどに仕事を楽しむことが可能となった。

**環境からの習熟要請：**ここでは、ピアヘルパーの依頼者が、習熟要請を投げかける環境となっていると考える。依頼者は、「癒してほしい、話を聞いてほしい」という習熟要請を西氏に向けるが、なかなか西氏は気づかない。とうとう、依頼者が本音をぶつけたことで要請が西氏に届き、西氏の習熟願望と環境である依頼者の習熟要請とが釣り合う流れとなり、西氏は適応した反応を取ることができたと考える。

**西氏の習熟願望：**西氏は家事援助が、ピアヘルパーの主要な仕事だと信じ、「役に立つ仕事をしなければいけない」と家事を積極的に行った。この時の彼の習熟願望は、家事援助ができることだった。西氏は、当事者から要請されたのは、精神的な安定や安心感に役立つことだと理解できなかった。家事援助に固執し、依頼者

の要請に気づけなかったため、ニーズに応えることができず、援助は空回りしていた。西氏の「家事をできるようになって援助しよう」という西氏の習熟願望と環境からの「癒してほしい、聞いてほしい」という習熟要請が不釣り合いな状況であったと考えられる。そのため、新たな挑戦や作業へと発展することはなかった。

しかし、依頼者に怒鳴られて要請されたことを理解し、自分の行動を変容させ、新たな作業に挑戦した。家事ではなく、依頼者の話し相手や相談相手になることに挑戦した。この時、西氏の習熟願望は環境からの習熟要請に一致するように変わったと考えられる。

これらの作業経験を繰り返すことで、西氏の習熟願望と環境からの習熟要請が、西氏に適した習熟重圧となり、新たな作業への挑戦やピアヘルパー業務の中での自分の役割を見出す結果となったと考えられる。そして、社会の一員としての役割を果たし、やりがいを持って自分のペースで働く機会を得たと理解された。

#### IV. 結語

発症から入院、再発を経て社会復帰し、ピアヘルパーになるまでの西氏の作業経験を、環境との関わりで追っていくと、症状の強い段階では、環境が西氏の心身の保護に働き、環境からの要請はセルフケアに限定されていたが、病状が回復していく段階になってくると、作業環境の要請が生産的なものへと移り変わり、それに応えて西氏自身も作業環境に働きかけ自発的に作業を選択して遂行していくことが可能となったことが理解された。発症してすぐの時期には、不安定な精神状態により環境から保護されなければならない状態で、西氏からの活発な習熟願望は生じず、環境からも生産的な習熟要請も生



じることはなかった。しかし、回復とともに作業願望が活発になり、環境からの習熟要請にこたえて、環境に働きかけて、他者との交流や社会参加の機会を作り出した。つまり、環境からの要請に応え次の作業挑戦が生じたと理解された。そして、社会の中で評価されて認められる経験へと繋がっていったと考えられる。このように、作業療法における環境は、物理的な空間だけではなく、その人を取り巻く他者や集団、作業形態も含んでおり、作業に深く関連する<sup>10)</sup>。作業適応の過程において、他者を含む作業環境との交流のなかで自分が認められる経験が生まれ、そのことが自己肯定感や成長への動機づけへと繋がっていくのではないかと著者は考える。

作業療法士は、精神障害を持った人が疾患や障害とともに生活し、健康感を持って生きていくために目の前の対象者がどのような習熟願望を持っているのか、対象者が置かれている環境からの習熟要請は何なのか、対象者の語りに耳を傾け、その人の経験を理解した上で分析し、その人からより良い作業挑戦を引き出すことを目指していく必要がある。習熟願望と習熟要請の釣り合いを取り、その人に合った習熟重圧を与えて、挑戦に導くことができると、次の作業役割や期待が生まれてくると考える。このように、作業療法では、対象者の習熟願望と環境からの習熟要請のバランスがとれるように機能させていくことが求められてくると考えられる。

このような作業療法の関わりは、精神障害者を対象とした作業療法だけでなく、他の領域の人に当てはまると考える。佐藤<sup>11)</sup>は、作業療法を「適応の科学」として捉え、クライアントの健康状態に応じて媒介としてさまざまな環境要素を用いながら、活動を注意深く選択し、最大限に適応反応を導くことが作業療法には求め

られてくると述べている。つまり、対象者の健康状態を把握しながら、その人にとっての「安心・安全の保障された環境」はどのような環境であるのか、また、最大限に適応反応を導き、その人にとって無理をせず自分らしく行動できる場として機能可能な環境を見極める力が、作業療法士には求められてくるのではないかと考える。それは同時に、対象者の安全を重視する時期と、対象者の願望と環境の要請が合致するような挑戦の機会を、作業療法士は対象者と共に探索し、その挑戦を見守り、援助する時期を見極める重要性を示唆している。

## 文献

- 1) World Federation of Occupational Therapists (2012). [http://www.wfot.org/About Us/About Occupational Therapy/Definition of Occupational Therapy. aspx](http://www.wfot.org/About%20Us/About%20Occupational%20Therapy/Definition%20of%20Occupational%20Therapy.aspx)
- 2) 伊藤順一郎: 統合失調症とつき合う 治療・リハビリ・対処の仕方 改訂新版, pp162-170, 保健同人社, 2005.
- 3) Willard and Spackman's (寺山久美子・訳): 作業療法における理論と原理の最新の基礎. Hopkins & Smith 編 (鎌倉矩子・他共訳), 作業療法 (上) 改訂第6版, pp35-53, 共同医書出版社, 1989.
- 4) Schkade, J. K. & Schultz, S.: Occupational adaptation: Toward a holistic approach to contemporary Practice, Part 1. *American Journal of Occupational Therapy* 46 (9). 829-837. 1992.
- 5) 西純一: 精神障害を乗り越えて 40歳ピアヘルパーの誕生. 文芸社, 2007.
- 6) 小田原悦子: 10. 実践を通して研究: クリニカルリサーチニング, 杉原素子, 古川宏(編):

- 作業療法士プロフェッショナル・ガイド, pp565-570, 文光堂, 2013.
- 7) 麻原きよみ:3. 質的研究の評価基準, グレック美鈴, 麻原きよみ, 横山美江 (編): よくわかる質的研究の進め方・まとめ方—看護研究のエキスパートをめざして, pp32-35, 医歯薬出版, 2007.
  - 8) 山根寛: 精神障害と作業療法—治る・治すから生きるへ, 第3版, 三輪書店, 2010.
  - 9) 精神障がい者ピアサポート専門員養成のためのテキストガイド編集委員会 (編): 精神障がい者ピアサポート専門員養成のためのテキストガイド 第3版, 「精神障がい者ピアサポート専門員養成ガイドライン」改定版, pp5-11, 一般社団法人 障がい者福祉支援人材育成研究会, 2015.
  - 10) Kielhofner G. (山田 孝・監訳): 人間作業モデル—理論と応用 改訂第2版, pp110-126, 協同医書出版社, 1999.
  - 11) 佐藤剛: 四半世紀からの出発—適応の科学としての作業療法の定着を目指して—, 作業療法 11, 8-14, 1992.

# The Process Towards Social Participation of a Mentally-challenged Youth: A Narrative Analysis using the Perspective of Occupational Adaptation

Fumi Saito<sup>1)</sup>, Etsuko Odawara<sup>2)</sup>

1) Department of rehabilitation, Hamamatsu city rehabilitation hospital

2) Division of Rehabilitation Sciences, Seirei Christopher University

E-mail : 07r001@g.seirei.ac.jp

## Abstract

The purpose of this study is to investigate how a person with mental problems participates in society and does or does not live with a sense of health and well-being.

“The Birth of The 40-year-old Peer Helper Who Overcame a Mental Disorder” written by Mr. Junichi Nishi (pseudonym). A man with schizophrenia was studied using narrative analysis to understand his occupational experience in everyday life and in every recovery stage, using Schultz and Schkade’s occupational adaptation process model. Schultz and Schkade proposed that the person reaches out to the environment and has a desire for mastery in interactions with it (desire for mastery). In turn, the social environment expects or demands the person to master this skill (demand for mastery). As a result, Schultz and Schkade stressed that the person is challenging the environment while engaging in his or her occupation, gaining an occupational role.

In the case of Mr. Nishi, in the symptomatic stage of the disease, his occupational demand from the social environment was limited, and mental and physical protection and self-care was his major focus in everyday life. However, for the sake of recovery, his occupational demand from his social environment expanded to include productive tasks. Thus, he challenged the environment, and realized social participation by performing tasks related to social work.

In occupational therapy, in order to help the patient become an active participant in society, and gain a sense of health and well-being, it is necessary to determine the kind of environment that can lead to maximal adaptive responses.

Key Words : Occupational Adaptation, Environment, Narrative